

四十九日忌

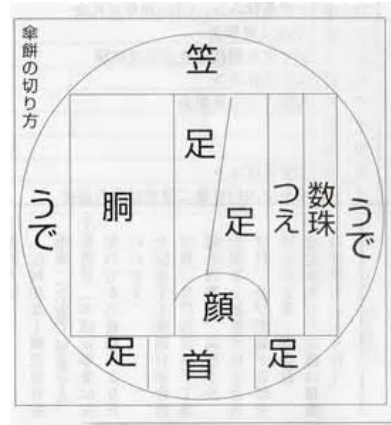
最愛の御家族のお一人がお亡くなりになり、
まんちゅういん
 満中陰七七日忌(四十九日忌)を迎えますと、
 ご遺族も僧侶もどこか安堵した気持ちになります。中陰の四十九日間は、亡き人が心豊かなみ佛の国で暮らせていただくための研修期間と言えるでしょう。四十九日忌はその卒業式であると思ひ読経をしています。そしてご先祖の一員として塗の御位牌に開眼式を行い、初めてお佛壇に入ってお供えする日です。



先日、妻が住職をするお寺の檀家さんから電話があり、「四十九日忌には『かきもち傘餅』をお供えするのですか?」というお尋ねがありました。京都市内で農家をされているNさんで、葬儀も最近では珍しくご自宅され、中陰も毎回親戚ご近所など大勢の方がお参りされるという普通通りに佛事をされた方だそうです。私は「四十九日の傘餅」を知りませんでした。

「傘餅」は四十九日忌法要に合わせ1升のお餅をつき、小丸餅49個とお好み焼きのような形をした丸いお餅を作ります。関西では、お餅屋さんに頼むようです。最近ですとネットのお取り寄せ(通販)にても購入できます。だいたいどこも3,500円前後です。それをお盆に半紙を敷いた上に7個ずつ7本に積み上げ、その上に丸いお餅を傘のようにかぶせお供えしま

す。法要後、丸小餅は「御下がり」として参詣者、ご近所に配られます。肝心なのは丸いお餅の方です。導師を勤めた僧侶が、生臭ものを調理してない包丁とまな板を使い、左図のように亡き人の旅立ちの



姿(すげ笠・杖・数珠・頭部・胴体・手・足)に切り分けをします。これらを下写真のように人型に並べます。これを「きつしょうもち吉祥餅」と呼びます。



吉祥餅は、遺族それぞれが「病」のある部分を持ち帰って食べるそうです。亡き人がその方の「病」をあの世界へ持ってくれるのだという信仰です。ちなみに妻がNさん宅で法要をした際には、足や膝の部分がすぐになくなったそうです。ただ、すげ傘と頭の部分だけは残します。喪主が玄関から庭に出て、北を背にして立ったまま、後ろ向きでそのお餅を北方へ、それも棟を超えるよう豪快に放り投げます。(汗)ちょっと楽しそう… 『中陰和讃』の七七日忌の一説にも「屋の棟離れて極楽へ、導きたもう、ありがたや」とあります。喪主による忌中の「メ」の行為と言えるでしょう。

旅立ち姿はこの世の人ではなくなったことを思い、空高く飛んで行った餅は「成佛」を思っています。それが四十九日忌です。 俊徳丸

『普段着』

血液検査をいたしました。その結果は、「あなたの血液は知らぬ間に、カゴメのトマトジュースになっていますよ！」と言われました。それくらい好きです、無塩**トマトジュース**。いつも永遠に並んでいると安心です。 俊徳丸